

カオス
(混沌)
の式

流す

流すことですよ

鍼師は遠慮がちにいう

凝り固まって澱んでいるものをほぐし

通り道を広げ

流れをよくすると

滞っていたものもあるべきように

行くべきように行くのです

自然にある筈のことが損なわれたとき

損なわれたところが苦しくなります

だから通り道を整え

溜まった老廃物やこみ入ったものを

ほぐしてやるのです

五十年の経験で得たものは

それだけだという

初老の鍼師のことばを

正確に伝えているのかどうか

おぼつかない限りであるが

大きくは外れていないと思う

そういえば座禅でも流すといった

座る、ただ座る

浮かんでくる諸々を、ただ流す

禅寺での面壁を前に

こむつかしい説教でも聞かされるのかと

なかば覚悟していたのに

和尚のことばはそれだけだった

四十五分の間

頭を過ぎる諸々を右から左に

左から右に流す
流すだけです

四十五分という簡単そうな

実は無限遠とでもいうべき時間の流れの

遅さに苛立ち

流すことの息苦しさに喘ぎ

恐ろしく流れの悪い四十五分が

ようよう過ぎれば

次の無限遠がゆらりと来てまた遅々と始まる

流すことです

ただ流すことです

鍼師は私の小さな経験にしか過ぎませんがと

顔を伏せながら小さくいった

栗の木を伐る

栗の木を伐った

新しい葉が

空の隙間を埋め重なり合い

青いイガが

百個余りも芽吹いていた

野趣に富んだ風情を好む

母が

四十五年前の新築記念に

幼い苗を

庭の片隅に植えたのだった

特別な世話など

何一つしないのに

庭を覆うほどの

見事な樹形となり

ずんぐり太った大粒の実

甘く柔らかかった

秋には

ピッカピッカに光る実を

近所に配り歩くのが

母の習いになった

五粒ずつだったのが

二十粒ずつになった

来年も必ず待つててね

車椅子を押す私も

一緒に微笑んだものだ

母は縁側に出て

スケッチブック一杯に

栗の木を描いた

後背の山より

栗の木は大きく

イガは太陽ほどもあった

満州時代の作も加え

個展を開くのだという

自分の名前も

よく思い出せないのに

栗の木を描くときは

渾身の玉の汗を流した

主を失った栗の木は

変わらずに葉を茂らせ

もっこりと

美しい金色の実をつけた

ほんの二年前のことだ

いま位牌を本山に預け

仏壇の性根抜きをした

宅地は願い叶わず

更地にせねばならなくなった

庭を覆う栗の木の根元に

鋸の歯を当てたとき

まだ青いイガが

突然ぼとぼと落ちてきた

空が驚いたのか

じぐざぐに揺れ

纏れ合い

次々と冷たい汗が飛び散った

肩凝り

持病中の持病の一つ肩凝り

肩凝りですかあ

と笑われてしまうかもしれないが

肩凝りは侮れない

三十年前激しい痛みで

左腕が動かなくなつた

痛いと言つて

鋭いもの

鈍いもの

焼けるほどに熱いものなど

いろいろだ

肩凝りの痛みは

三つが合わさつたという痛みで

呼吸ができない

ものが言えない

眠れない

整形外科をハシゴし

マッサージに通い

お祓いにまで行つた

やけっぱちで鍼の門を叩いた

最も信用しなかつたのは事実で

コリをほぐすという説明が

インチキ臭く聞こえた

ふて腐れて治療台に一時間

折り重なつていた疲れが

一ミリほど剥がれた

二回目に三ミリほどが剥がれ
手が上がる

手が上がりますよ

思わず鍼師に言ったものだ

頑固な癡りなので

ほぐせるのかと気を揉み

久しぶりに必死になりました

少し斜めを向いたままで

盲目の鍼師は

静かなリンとした声で言った

于 孟蘭盆会

仏前に香花灯と共に
菓子果物等々を供え
家族一同うち揃いて
供養するなり

読経に続き
和尚の言葉が朗々と響き
鉦が鳴る

位牌には戒名が書かれ
写真の在りし日の笑顔は
変わらない

東日本大震災のこと
知ってる
そう聞いてみても

言葉は返ってこないけれど
皆知ってるよ
という念波が来ている
気がする

ならば進学のことは
ならば就職のことは
なんとかなるさ
と念波にはそうある
願わくばこの功德を
子々孫々にまで及ぼし
たまえ

和尚の言葉は
まだ続いている

あつちもこつちも
結構大変なんだよ
だから信じて進むしか
ないだろう

誰かがそう囁いた
気がして
鉦の音を聞いた

ヒグラシを聞きに

深山溪谷で鳴くものと

ばかり思っていたヒグラシ

太宰府政庁跡の林でそれを聞く

林に足を踏み入れ

耳をそばだてる

カナカナカナ

リンリンリン

とは鳴かない

リリリーリリリーだった

ルルルルルルルだった

キキキキキキキだったりする

高い澄んだ声で

木々のあいだを声だけが

飛び交い

リリリリーリリリ

キキキキキキキ

とあたりに訝する

左に足を踏み出すと

左で鳴き

右に足を踏み出すと

真上で鳴いたりする

幼い頃

羽が眩いほどに透명한

蟬に出会ったことがある

田舎の山奥でだった

いま鳴いているヒグラシも
多分羽が光に溶ける
美しい透明な姿をしているに
違いない

声の方をずっと見上げても
声に移った方向に
目をじっと向けても
羽も姿も見えない

リリーリリリリー
ルルルルルルルと美しい
胸に染み入る声で
鳴いているのに

目の前を
何度も飛び交い
過ぎつたに違いないのに

多分羽が光に溶ける
透明な姿をしているので
人間の目には見ることが
できないのだ

ほらそこで
いまも
リリリリリリリー
キキキキキキキと美しい
胸に染み入る声で
鳴いている

灯籠踊り

千人の浴衣姿の乙女たちが
頭上に金銀の灯籠を頂き
よへほ節のゆったりした
リズムにあわせて踊る

その昔の松明が

灯籠に変わり

頭上の金銀の灯籠は

和紙と糊だけで作られている

薄暗闇に千の灯が浮かび

千の蛍が渦を引いて舞う

乙女たちの表情は

天から舞い降りてきた

天女のごとくに

きりりと口結び

ほのかに笑みを浮かべ

あちらの世界へ迷い込んだ

に違いない

妖しささへ漂わせ

ゆっくりとゆったりと

斜めに横に

あちらからこちらへと

幾千の螢火となり

幾千の燐光となり

はじけ

翔けめぐり

胸奥の遙かなものに向かい

打ち付け打ち寄せ

穿ち揺らめく

法師蟬

庭先で

突然法師蟬が鳴き出した

ガラス窓のすぐ上のあたりで

大きな声で泣き出したので

ガラス窓を透かして

見上げた

昨夜の嵐で痛めつけられた

ダリアや

盆栽仕立ての松や

初秋の暖かい日射しを浴びて

ゆらりと立つトネリコのむこうの

隣屋から伸び出した樅の古木の枝に

銀色の羽をせわし気に揺らしながら

あたりの空気を震わせて鳴く

法師蟬がいた

風が曲がって吹いていた

トタン屋根がめくられていた

道路標識が転がっていた

家々の戸が開き

子どもたちの甲高い声が叫んだ

今日学校は休みだね

運動会は延期だね

法師蟬は少しずつ

後ずさりながら

大きな声で鳴き続けていた

ハグロトンボ

梅雨の頃から

ひっそりと居る

ハグロトンボ

濡れ縁に

玄関の伝い石に

夏草はびこる庭隅に

黒い紗の羽を広げたり

ゆっくり閉じたり

瑠璃色に光る細い胴体を

ピンと伸ばし

もの言わず

同じところに

翌日も翌々日も居る

湿った西風に飛ばされそうに

なりながらも

濡れ縁に

玄関の伝い石に

夏草はびこる庭隅に

貼り付いている

西風のときは羽を東に寄せ

東風のときは羽を西に寄せ

クマ蝉が賑やかに鳴き

アブラ蝉が幾度も幾度も鳴き

塩辛トンボが鼻先を過ぎつても

つくねんと

同じところに居る

蛙

表札に雨蛙が止まっている
軒の庇にも三匹
インターフォンにも一匹

ケロリとも鳴かず

動かず

セルロイドの置物よろしく
とまっている

可愛いですね

と喋ってくれた客もあったが
驚いたという客もあった

いつの間に住み着いたの
だったか

家族の話題に毎日のぼり

休みの日にもわざわざ
覗きに出て行く習わしにさえ
なった

いつもの場所に

いつもの顔ぶれが

すまし顔で

我が住まいはここだ

と誠に悠然ととまっている

一国一城の主なのだ

無人の家

無人の家をよく見かける
ほんの数年前まで

娘が孫を何人も連れて

いつも来ていた

夫人は

孫が来るのは嬉しいけど

守りをするのは大変だ

と言うのが口癖だった

半年前

トラックが二台来て

荷物を運び出して行った

転勤でね

と言う挨拶だった

定年を過ぎての

転勤もあるのかもしれない
と何も尋ねなかった

いつの間にか

周囲に無人の家が目立つ

無人の家は

雨戸が閉ざされ

門が閉ざされ

庭草が一面に覆い

庭木も屋根を覆い尽くし

四方に向かい茂る

同じ日に

無人の家の剪定が行われた

一軒は築四十年になるわが実家

門かけのメインツリーを

根本から切り倒し

垣根は塀よりも二十センチ低く

刈り込んだ

周囲の家々に迷惑をかけて

いるらしい

特に落ち葉の時期は

掃除に通い

周囲への挨拶に

幾度も廻ってきた

もう一軒は

あの孫だくさんの家

道路に大きく伸び出していた

モチの木や

カシの木や

鈴なりの実をつけたカキの木が

根本からバツサリと

切り倒されていた

カオス

小学生のボクを映し
中学生のボクを映し
間遠に落ちてくる雨だれ

一粒の雨だれの中に
小学生のボクがいる
拗ねて振れた顔をして
何にもつかまるものがない
という

恐れただ中にある
何を恐れたのか
何に拗ねていたのか
小学校に上がる頃までは
その訳を記憶していた
と思えるのに

小学四年生ぐらいから
理詰め of 授業が始まり
カオスとして抱えていた
記憶が消えてしまった

一粒の雨だれの中に
中学生のボクがいる
あの虚弱児だったボクが
変わったわけではないが
筋骨逞しくなり
百姓の仕事なら
一通りはこなせる
ほどになった

喧嘩はめっぼう強い
二人を投げ飛ばしたり

グラウンドでは

課外活動中に

戯れから始まり

相手の首を締め上げ

寸前のところまでいった

何でこうふて腐れて

いたのだったか

雨だれはいかにも気怠げに

落ちていくのだが

こんな田舎の片隅に

押し込まれていることに

本気で怒っていたことだけは

確かだ

理屈など言えないから

喧嘩ごしでしか言えないから

心臓の具合が悪いことなど

つい忘れてしまい

売られた喧嘩に明け暮れた

ボクを映す雨だれ

本当は小学校に上がる前の

雨だれに出会いたいのだが

何かを抱えてきていた筈の

淡々としたあのものの

姿と気分はあるのだが

多分あつたのだが

思い出せない

カオスとして抱えてきた

それが何だったのかを

即興曲

ふいとメロディが浮かんでくる
何の曲だかわからない

多分即興の曲だ
と勝手に思い込む

おたまじゃくしも知らないし
音楽のイロハもわからない
変てこりんなメロディであるに
違いない

勝手に湧いてきて
すぐに消えてしまう

草のそよぎのメロディ
雲が流れるメロディ
葉が散りゆくメロディ

記憶にも残らない
今だけのメロディ
自分だけのメロディ
これでも即興曲などと
言えるのだろうか

定義など知らないから
今もトンボの群れ遊ぶ
メロディに一日浸っている

入道雲

飛行機の窓から入道雲を
見下ろす

鋭く切り立った崖が

奈落の谷となり

照り輝く雪渓が

いくつもいくつも

遠くにある

近くにある

目の前にもある

念仏寺の

野仏の頭の一面に

降り積んだ雪景色の

ごとくもあり

生きとし生けるものが

いつか必ず通るのだという

白銀の道のごともある

飛行機の胴体を

激しく揺らす気流の

上り下りなど頓着な気に

幾劫とも知れぬ

世紀を越えてきた

氷河の

氷山の

氷雪の厳しさに似た

太古の世界から吹き上げる

真白い綿毛にも似た異形のもものが

ひよっこりと湧き起こり

飄然と

悠然と

宙に漂っている

海峡の風

手を伸ばせば届きそうなところに

大きな街がある

街と街とを海峡が区切っている

外国船が通り

漁船が旗をなびかせて通り

連絡船が街と街とを結ぶ

街と街とは五分間の距離だ

潮の流れが速いことで有名な海峡を

大きく揺れ躍りながら

連絡船が風を切って進む

操舵室では若い女性が舵を握る

対岸の船着き場では

ぐらつく足元を確かめながら

船を降りる

岸が揺れているのか

自分が揺れているのか

波がうねっているのか

酔いの中に入っていくのか

目眩に似た酩酊を瞬時感じる

岸に降り立てばいきなりレトロ街で

明治の建物の出迎えに

不意の戸惑いを覚える

レトロ街の真ん中に超近代ビル

海峡の風はさらさらと吹き

五月の光を運び

駅前の噴水を子供たちの群れに

やさしく吹き流している

窓の外

六月の雨が降り籠める

空がいかにも重たい

伸び出した新芽が項を垂れ

下に真下にと降る

郵便受けに

カタログやハガキと一緒に

雨の粒が流れ込む

ハガキの宛名は膨れあがり

名前が読めない

気鬱が晴れない

出口のないことばが何度も

胸の内を巡り

濡れそぼった猫が

綿毛の尻尾をうち振り

音のない歩きでよぎる

寺の鐘がああおんと鳴り

今が夕暮れであることを

知らせているらしい

雨が真下に降るほかに

見えるのは

新芽の吐息と

肩の萎れた屋根ばかり

ゴッホ展

「ひまわり」の奔放さ

「灰色のフェルト帽の自画像」の激しさ

炎の画家といわれるゴッホの絵は

荒々しい気性の天才が

自由に書き殴ったものだと

うかつにも思っていた

ゴッホは三十近くになって

一人で絵を始め

ミレーなど大家の絵を

何枚も何枚も模写し

「掘る人」や

「種まく人」や

「刈る人」などという

同じ題名の素描を

これでもかこれでもかと

一心に描き続けている

バースペクティブ・フレームという

定規の形状の道具を用い

フレームから覗いたものと同じ対象物を

一点をもゆるがせにせず

忠実に写し取り

キャンバスに模写している

ゴッホの絵は

実に正確で繊細な技術と理論に

裏打ちされており

哀れなほどにおどおどしており

どこに未来の炎の画家の芽生えが

あるのだろうか

悲しくなるほどに小心だ

くだんの「自画像」にしろ

最後の時を過ごした「療養院の庭」にしろ

一点一点を痛性なほどに

明るい色と暗い色を交互に

貼り合わせ

正確無比な精緻さで描かれている

誠実で誠実過ぎるくせに

ナイーブでナイーブ過ぎるくせに

ゴッホの紡ぎ出す一点一点は

何故かほとばしり出る

明るさを伴って

何故にかほとばしり出る

しんじつな激しさを伴って

不思議な光の火矢となり

百二十年のはるかな時空を超え

今やさしく輝いている

偉人

野口英世は偉人中の偉人だと
思っていたら

百姓の家を継ぐのが嫌で

籍を抜いたり入ったり

金を踏み倒して

女遊びをしたり

飲み倒したり

懲りずにまた

金を借り倒したり

ストーリーまがいのことを

しでかしたり

結婚詐欺まがいのことを

やらかしたり

親と上手くいかないのは

当たり前という態度

姉と喧嘩したり

故郷の人々に

毛嫌いされてでも

なお

初志を貫徹した

偉人中の偉人となり

偉人伝に載せられるには

生半可な偉人では

とても

お呼びがかからない

ということなのだろう

竹と風

竹の道を行く

青い節が気持よさそうに伸び

青い枝が涼しそうに触れ合い

青い葉が奔放に翻る

竹の道を青い風が吹く

ゴウゴウと節が揺れ

サワサワと枝が鳴り

シヤラシヤラと葉が踊る

青い風は竹の道から生まれる

真っ白だった風も

鼠色だった風も

竹の道に吹き入ると

途端に青い色に染まっっていく

青い風は空の高みへと舞い上がった

沢の水音に沈み込んだり

竹群の中に木霊となつて

住み続けたりする

竹の道を行くと

シヤンと背筋が伸びる

足先から頭のとっぺんを抜け

何かがスツと伸び上がる

竹の道に青い風が吹くと

目が醒める思いで

はるかな遠くのものに触れた

気がしたり

すっかり忘れていた

大切な問答を思い出したりする

川

男は蚯蚓を掘っていた
麦藁帽子の下には

脂だらけの顔があつて
汗と一緒に泥が流れ落ちていた

子供の熱は四十度を越え
二週間を過ぎた

男は毎日

無理矢理拌み倒し

村の医者連れてきた

医者はヤケクソだと呟き

何十本もの注射針を刺した

子供の熱は四十度を越え
吐く息が荒く熱く

だんだん間遠になつた

蚯蚓を飲ませたらええ

明け方のまどろみに

かすかにか細い

ことばがひよいと降つてきた

枇杷の実が熟れていた

川の真ん中を

くちなわがゆうゆうと

横切つていった

男は一心に蚯蚓を掘っていた

男の目には

枇杷の実の金色も

くちなわのふてふてしさも

映つていなかった

揚羽蝶

わたしは病んでいた
ゆえ知れない脊椎の痛みに
心臓は激しくあえいでいた

わたしの眠りは
苦しい息遣いの中で
ふいに目覚めた
ほつかりと浅い
奇妙な目覚めであつた

まことに
果てのない荒野に
むやみやたらに
雪が降っている
のであつた

眼を開いてみると
漆黒の揚羽が
雪のいたる所に
点々と
果てもなく点々と
舞い降りたらしく
ビロードの布切れの
千切れた
荒々しい息遣いから生まれた
夥しい
花を咲かせていた

掃除

考えに行き詰まり

仕事に生き詰まり

神経を宥めることに

行き詰まったりしたときは

ネクタイを外し

ボタンを外し

時計を外し

テレビを消し

パソコンなど放つたらかし

水をジャージャー流し

腕をまくり

雑巾バケツに手を突っ込み

頭のネジを

理屈のネジを

まず緩めてみる

棚の品物を見上げ

さも大切そうに出張っている

ファイルなどを

隅に追いやり

埃にまみれた

棧などを

ほどよく丁寧に拭いてやる

自分の心を洗おうなどという

たいそうなことではない

リズムを取り戻そうなどという

たいそうなことでもない

ただ目の前の

いつも当たり前前の恰好に
出張っているやつの
向きをひよいと
ずらしてみる

水をジャージャー流し
腕をまくり上げ
雑巾バケツをまぜかえし
頭のネジを
顔のネジを
ちよつとだけ緩め
大あくびをしてみる

水の跳ねに濡れ
水の跳ねを跳ね返し
このヤローなどと
怒鳴りながら
高笑いをする

アルキスト

煙る雨の中傘をさし

玄関を出る

ジャージに運動靴という恰好の

新米のアルキスト

歩数計を腰に

颯爽などとは

お世辞にもいえない

ヒヨコタンヒヨコタン

歩きで

かなり年期の入った

周囲のアルキストたちを

横目に眺めながら

五千歩は歩く

先日は少々欲を出し

二倍の一万歩を歩いた

一時間と四十分だ

一時間四十分も歩き続けたのは

十九歳か二十歳の頃

三郡山縦走とやらを

面白半分に

年に十回もやったとき以来の

ことかもしれない

もつとも

酔いどれて

篠栗から福岡まで国道を歩いたのは

二十歳も半ばのことであるが

それは酔いの座興の

戯れでしかない

目的をもって

ひたすら歩くなどというのは

四十年ぶりのことだ

歩くために歩くこと

これが職を辞した自分に

課された仕事といえは仕事だ

運動という運動を

したことがない身に

ジャージに運動靴という恰好は

まるで様にならないのだが

四時や五時の時間帯に

周囲のアルキストたちに習い

手ぶらで歩いているということが

なんとも落ち着かない

栗のいが

栗のいがを見つけた
春の草むらの中に

茶褐色のハリネズミが
草むらに潜んでいたのかと
驚いて後退った

草の途中で
クルリと動いたもので
小動物かと勘違いしたのだ
茶褐色の栗のいがは
おそらく枯れ葉の下にでも
埋もれていたのだろう

それが、草がフツツと

背伸びして
宙にまで伸び上がった
ものだから

一緒にフツツと
宙にのぼってきたのだ

いがの中からは
ひしゃげた実が顔を出し
クルリと動いた拍子に
日射しのまぶしさの中
くしゃみをひとつ
プシツとした

快晴

冬まったただ中の青空

雲の一点もない

この冬は北風強く雪が舞い

曇天続きだったから

まばゆいばかりの青い空

こんなにも空が高く

こんなにも澄み切って

こんなにも山影が鮮やかで

こんなにも空気が美味しい

学校のチャイムが

コロコロと響き

子供達のはしゃぎ声が

甲高く聞こえる

ゆつくりと鳥が舞い

飛行機雲がいつべんに天頂まで

伸び上がる

山茶花の花弁が重なり合って

散り敷き

モミジやカキやクリの落ち葉に

日の光がほっこり潜り込み

湯気をたてる

こんなにも空が高く

こんなにも澄み渡って

学校のチャイムが

カラコロと響き

子供達のはしゃぎ声が

甲高く聞こえる

春と海

磯部に寄せる波の音が
眠気を催させる

波の音は

きつと生まれる以前に
聞いた

なつかしい混沌とした

あのリズムの

ままなのだろう

いつかの時に

なにかの石だったか

なにかの高い雲だったか

そんな

なにかのさだったとき

胸いっぱい聞いていた

あのリズム

磯部に寄せる波の匂い
新しくて

途方もなく

古くて

なにがなしにゆかしい

ほとんど

胸が詰まってしまうほどに

切なく

涙ながらに聞いていた

あのリズムの

ままなのだろう

いつかの遠い時に

なにかの草花だったか

なにかの高い雲だったか

そんな

なにかの田だったとき

無我夢中で聞いていた

あのリズム

遙かな眠りのときと

幾百千ものどだったとき

すっかり満ち足りて聞いていた

あのリズムに

つい誘われていってしまふ

春の海の

波の音に

雪

空を縦横無尽に雪が舞う

台風を思わせる北風にのって

北風とはいえ

西から吹き込んだり

東に回り込んだり

地面を掬い上げたり

頭上から威圧してくるのだった

風の向きはコマネズミ同様に

変わる

雪は縄目に似た道筋をつくり

空を流れたり

雪同士がぶつかったり

ひよいと交わしたり

右に走ったり

左に流れたり

旋回して戻ってきたり

気ままに舞い躍る

今朝の雪は頬を激しく打つけれど

北風は激しく向かってくるけれど

そんなに痛くもないし

寒くもないのはなぜだろう

空を縦横無尽に雪が舞う

台風ほどにも激しい北風にのって

地面を掬い上げたり

頭上から威圧してくるのだった

するけれど

クリスマスソングでも

流れ出してきそうに
胸をときめかせてしまう

雪が明るい光を

纏っているからだろうか

空を縦横無尽に舞うとき

折りからの日の光とともに

喜びに乱舞しているかのごとくに

翻るからだろうか

黄色いランドセルの上にも

雪が高く渦巻き

大きな歓声をあげているのは

おそらく

子供たちだけではないだろう

埃

埃を払う

埃を拭き取る

埃が舞い上がる

埃が降ってくる

自分の小さな部屋を

職場のこびりついた窓を

伽藍の天蓋を

六十万石の天守を

年の終わりに

男が

係員やパートタイマーが

小僧達が

町内会の世話人達が

雑巾を濡らし

はたきをかけ

青竹を差しのばし

埃を払う

年の終わりの埃は

渦を巻き

蛇のとぐろのかたち

竜巻のかたち

男達の頭に

小僧達の衣に

野球帽の頭上に

煤となって舞い降り

煙となって湧き上がり

やがて

幔幕の向こうに

嵐が引きゆくかに

飛び去ってしまうのだから

不思議だ

実に摩訶不思議だ

深呼吸

頭の芯が煮詰まっていたり

神経が絡み合っていたりすると

首痛く、頭重く、胃が張り

重たい自分に

変わってしまう

眠れない

起きあがれない

生欠伸を連発する

些細なことに傷つく

頭の芯が煮詰まっていたり

神経が絡み合っていたりすると

腹の辺りにどろりと

気持の悪い気配があり

首筋が凝り

血流が遅く鈍くなり

動けなくなる

現代病かもしれない

職業病かもしれない

今時の仕事は殊の外複雑で

展開が早く

息が抜けない

人間関係が冷たくなったのか

がさつになったのか

他の分まで思いやるゆとりなど

なかなか見出し出せない

身分の保障もままならないし

いつ寒空に放り出されるか

わかったものではない

そんな誠にお寒い事情だから

気持が沈み

内に籠もり

糞虫になつたりすることも

無理もないことだ

そんなとき

腹の空気を吐き出し

ありつたけ吐き出し

吐いて吐いて吐き尽くすと

腹も、頭も、肩も

楽になり

温かくなり

すつきりするのだが

深呼吸さえできないほど

疲れきっている

場合が場合のときに

万一、ビルの屋上から見下ろす前に

きな臭い瓶の蓋を開ける前に

アクセルをガツと踏み込む前に

自棄でもいい

息を吐いてみることだ

吐いて、吐いて

吸ってみればよい

吐いて、吐いて、吐いて

吐き尽くしてみればよい

六月の台風

風速三十メートル

ではあるが大型だという

珍しく朝鮮半島の方に向かいゆく

台風の間がかすめるであろう

九州にあつてさえ

一日中軒の音に似た

まぜつかえしの風が吹く

暑い

蒸し暑い

通りに出れば電線が撓み

シャツの背中が膨らむ

湿った風を切る

自転車のペダルが重い

木の葉が吹き千切られ

高く舞い散る

暑い

やけに暑い

三十九度八分というのは

関東の方のことだけど

これもこの

台風が持つて来たのだという

今の時期

このコースなど

覚えがない

覚えがないことが多すぎて

少々なことでは驚かないけれど

べったりした風は

爬虫類の舌のごとく

やけに粘り粘って

纏わり付いてやまない

秋

舞い上がった飛行機が
空を食べてしまったので
空はあつけらかんとしています

青い息を吐いているので
ズックがひとり
夕日をみがいています

街の店では
洗面器の大安売があつたので
みんな薄の穂を
くわえて歩いていきます

いましがたまで
汽車の窓から見えていた風景は
みどり色にふくれあがつた
まんじゅしゃげの心臓です

海辺では
母が寝込み

ブランコ

新しい日の光を浴び
ブランコが人待ち顔に
微笑んでいる

青いブランコに
ズツクを履いた男の子が乗った

白いブランコに
リボンをつけた女の子が乗った

青いブランコと
白いブランコは

透き通った日の光のなかを

キラリ

キラリとくぐり

交互に
空に向かい
山に向かい

高く強く
強く高く

口笛を吹きながら
気持のよい風の音を
いっぱいにくらませ

空へ空へ

山へ山へと

のぼっていった

ずんずんのぼっていった